

~~~~~  
 ファミリーダイヤル  
 ~~~~~

## 母 の こ と

高 井 千 夏

母は私が小さい頃から土日も朝から病院に行っていた。一緒にどこかに出掛けても度々ポケットベルが鳴り、公衆電話を探していた。ポケットベルが最新の携帯電話に変わって、私が病院の携帯電話を持つようになって、一緒に映画に出かけたとき母の院外携帯は鳴っていた。

そんな母の姿を見て育った私もそして姉も、母と同じ職業を選んだ。母の方から医者になることを勧められた事は一度もなかった（ならなくていいんだよ、といわれたことはあったような気がするが）。でも私たちにとっては自然な事だったのだと思う。

大学卒業後、初期臨床研修は母と同じ病院になった。

初めは、私の方は病棟でどのようにふるまえばいいのかなと、少しそわそわしていたのだが、母の方はというと、当然のように一指導医であった。娘だから厳しいということも手加減するということもなく、私は母の早口な指導を聞き漏らさないようにと必死だった。

「お母さんがいたらやりづらくないの？」とよく言われたが、当の本人たちとしては全くそのような事はなく、私は同じ病院で母が働く姿を見られて本当によかったと思っている。

もちろん家に帰ればもとの家族であるが、家の中でも自然と病院の話題が多くなり、時には夕ご

飯を食べながら母に“コンサルト”することもあった。そんな会話ができるようになったことは、同業者の大先輩に少し近づけたようで素直にうれしいものだった。

私が研修医の生活にも慣れてきた頃、母は臨床の第一線から少し離れた。あるとき、何気なく会話をしている中で、母は言った。「これからは新しい目標があるんだ」。私はそれを聞いてはっとした。常に目標を持ち続けている、その事に心から感心してしまった。母がいつもバイタリティにあふれている理由がなんとなくわかった気がした。目標を語る母はとても若々しく見えた。

同じ職業について初めて、母の気持ちが少しわかってきたように思う。私の医師としての人生はまだ始まったばかりなので、これからさらに母が経験してきた苦勞やまたは楽しみを知る事になるのだろう。あのとっても早歩きの母の背中になんとか追いつけるように、私も常に目標を持ってこの仕事を続けていきたい。

そんな母も、今は孫ができ、週末に会えるのが何より嬉しいようだ。これからは自分の時間を大切に、仕事以外の時間も十分に楽しんでほしいと思う。

そして何より、体だけは大切にしてください。

〔新潟市民病院副院長〕  
 〔高井和江先生ご息女〕